

北大方式の高大連携活動の枠組みと 十勝地域における実践例の検証

北海道大学 池田 文人, 鈴木 誠

1. はじめに

北海道大学では、平成13年度入試よりAO入試を導入した。AO入試は、受験者と大学との双方の合意により入学の可否を決定するものである[1]。書類や面接、課題論文などを通して受験者の情報を一方的に大学が得るだけでなく、受験者にも大学に関する情報を大学が積極的に提示する必要がある。これにより、AO入試の受験者だけでなく、一般受験者に対しても、大学入学後のミスマッチングの解消が期待できる。このような観点から、北海道大学では、現在積極的に高大連携に取り組んでいる。

北海道大学が考えている高大連携の具体的な活動は多岐に渡る[2]。高校生向けの公開授業や、いわゆる出前講義だけでなく、オープンキャンパスや体験入学、キャンパスツアーなど従来の広報活動も、高大連携という観点から見直しを図り、それぞれの活動の目的や趣旨を明確にしようとしている。本論文では、北海道大学においてAO入試が導入されたことを機に独自に取り

組でいる地域説明会の目的や趣旨を示すとともに、その実行を可能とする組織体制を紹介する。最後に、平成13年に十勝地域で行った地域説明会の枠組みを紹介する。

2. 北大式高大連携活動「地域説明会」

大学進学を目指す高校生にとって、大学でどのような教育がなされているか、またどのような研究が進められているかといった、大学の活動内容を知ることが最大の関心事となっている。大学の情報は、様々な大学側の広報活動によって高等学校側に提供されている。例えば、進路指導部を窓口にした訪問活動や、進路指導部高校教員を対象にした「大学説明会」は最も広く行われているものである。前者の場合、伝えた情報が進路指導部内に停滞してしまうことが多い。後者の場合、進路指導の鍵となる層の高校教員の積極的な参加が期待できない。いずれの場合も求める高校生に大学の新しい情報を直接伝えることができない。一方、最近オープンキ

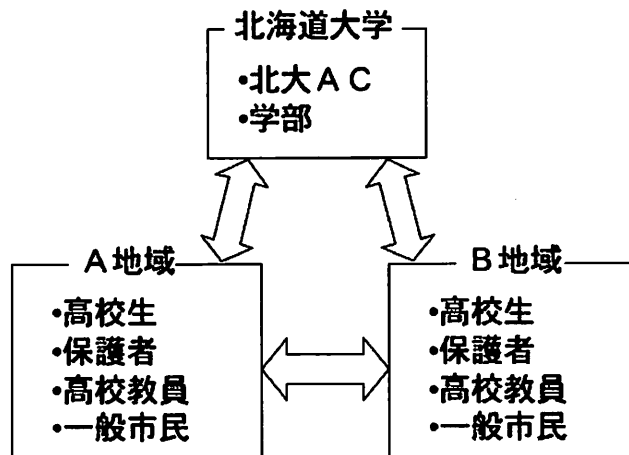


図1 北大式高大連携「地域説明会」の枠組み

キャンパスや体験入学の実施が広く浸透してきたが、実施時期やアクセスの問題のために、ターゲットとする層の高校生が参加するとは限らないという情報伝達の効率性の問題が生じている。

ところで、進路指導は学校だけで完結されるものではない。高校生の場合、家庭に帰った後の保護者の様々な助言が大きな影響を及ぼしている。そして保護者は生活基盤のある居住地域のコミュニティから影響を受けている。したがって、高校生が、北海道大学への進学を動機づけられ、それを維持していくためには、保護者を含めた地域のコミュニティに北海道大学を受け入れてもらう必要がある。

一方、大学の入試広報の一環としての高大連携活動では、大学の入試制度を高校教員や高校生にきちんと理解してもらうことが重要である。特に、AO入試に関してはその定義の幅が広く、出願に対しネガティブに捉えられるケースが依然として強い。高校教員の入試に関する関心の低さと進路指導室内での情報の停滞により、正

しい情報がきちんと高校生に伝わっていないことが原因の一つであると考えられる。

これらの問題点を払拭するには、高校生、保護者、高校教員を巻き込んだ高大連携の新しい形態が必要である。それが図1に枠組み示す北大式高大連携「地域説明会」である。この形態のメリットは、直接高校生に大学の新しい情報を提供できる点や、地域に大学が外向くことによって、保護者や現場の高校教員に直接働きかけを行うことができる点にある。しかしさらに重要なのは、説明会へ向けての企画、運営、実施において協同して作業を進めることができ、高等学校側と大学側が進路指導における諸問題を共有できる点にある。このような地域説明会による高大のメリットをまとめると図2になる。

地域説明会を開催することで、高校と大学の両方にメリットが生じることにより、地域説明会の開催を円滑に進められるとともに、より緊密な高大連携を図ることが期待できる。

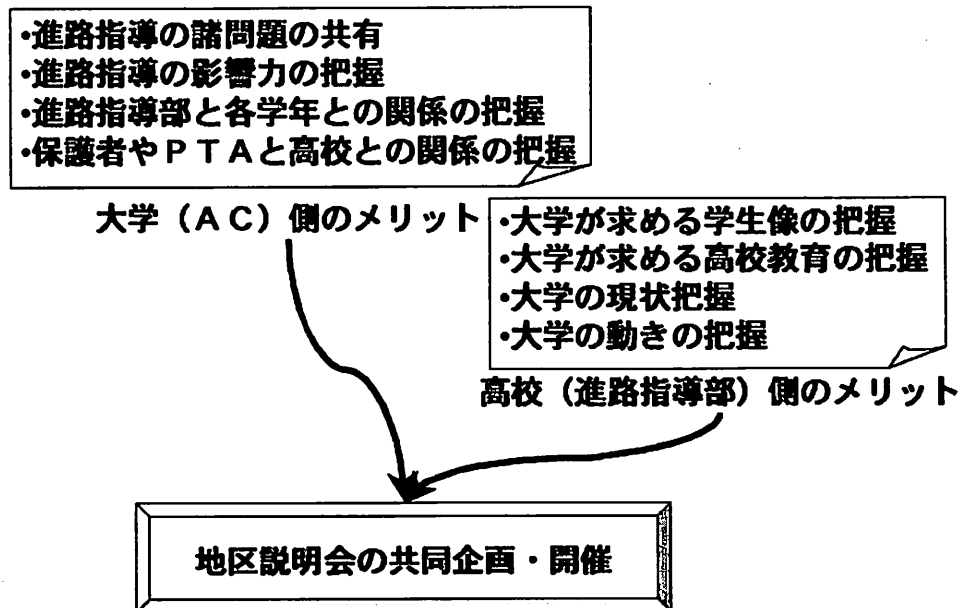


図2 北大式高大連携「地域説明会」における高大のメリット

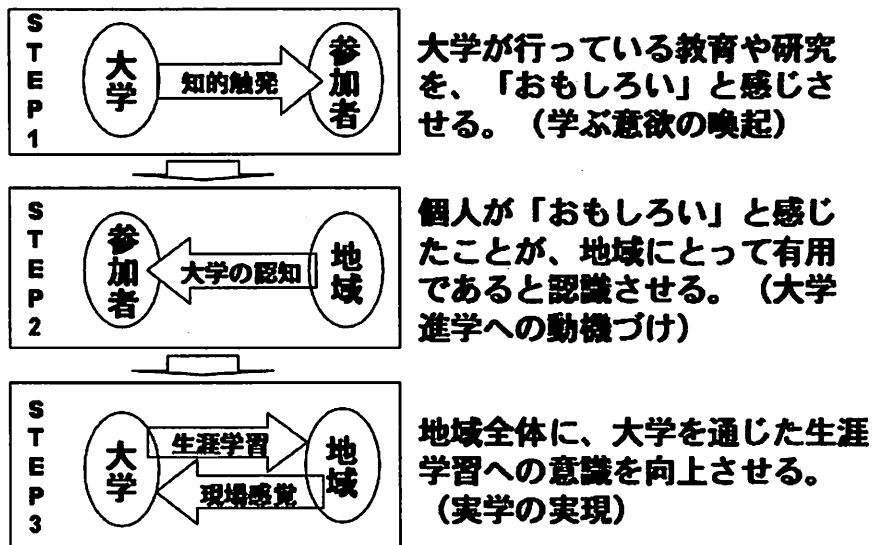


図3 北大式高大連携「地域説明会」の三つの目的

このような地域説明会を行うことにより図3に示す三段階の目的がある。まず、北海道大学の情報を提供することにより、参加者の知的好奇心を促し、学ぶ意欲を喚起することである。次に、学ぶ意欲を喚起された人がその地域が増えていくことにより、その地域全体が北海道大学を身近に感じ、かつ有用な存在であると認識してもらう。これにより、高校生等が北海道大学へ進学することを、その地域全体が支援することになる。最後に、地域に支援された入学者が北海道大学に増えることにより、その入学者を通じて地域における現場感覚が北海道大学に取り込まれ、その地域に根ざした教育や研究が行われるようになる。このような教育や研究を行う北海道大学は、その地域にとっての生涯学習の場となる。こうした大学と地域との相互作用を通じて実学を実現する。

3. 北大式高大連携を可能とする組織

北海道大学において高大連携活動を推進する部署はアドミッション・センター（以下、北大ACと略す）である。北大ACはAO入試を導入した平成12年度に設置された。北海道大学の北大ACは、事務官（入試課AO入試担当専門員および専門職員）と、教員（入学者選抜企画研究部

の専任教員）とで構成されている。その特徴は、入学者選抜企画研究部が上位組織である高等教育機能総合開発センターに属していることである。このセンターは、入学者選抜企画研究部のほかに、全学教育部、高等教育開発研究部、生涯学習計画研究部を擁している。全学教育部は教養教育と各学部の専門の基礎となる基礎教育とを企画・調整する部局であり、入学者選抜企画研究部の教員は教養教育科目を少なくとも一つ担当することになっている。高等教育開発研究部は、国内外の教授法や教育業績の評価法、高等教育のあり方に関する研究などを行い、その成果を大学教育の中で実践している。生涯学習計画研究部は、生涯学習計画の体系化、および、地域への大学開放の在り方などについて研究を行っている。

入学者選抜企画研究部は、大学入試、特にAO入試に関する研究開発を通じて、高校と大学との教育連携という高等教育開発研究部の視点と、地域と大学との連携という生涯学習計画研究部の視点とを共有し、これらの研究部と連携しながら実践的研究を行っている。北大ACがこうした入学者選抜企画研究部を取り組むことにより、大学入学前から入試、そして入学後の教育、卒業後の教育という長期的な観点に立った北大式高大連携「地域説明会」を北大ACで実施するこ

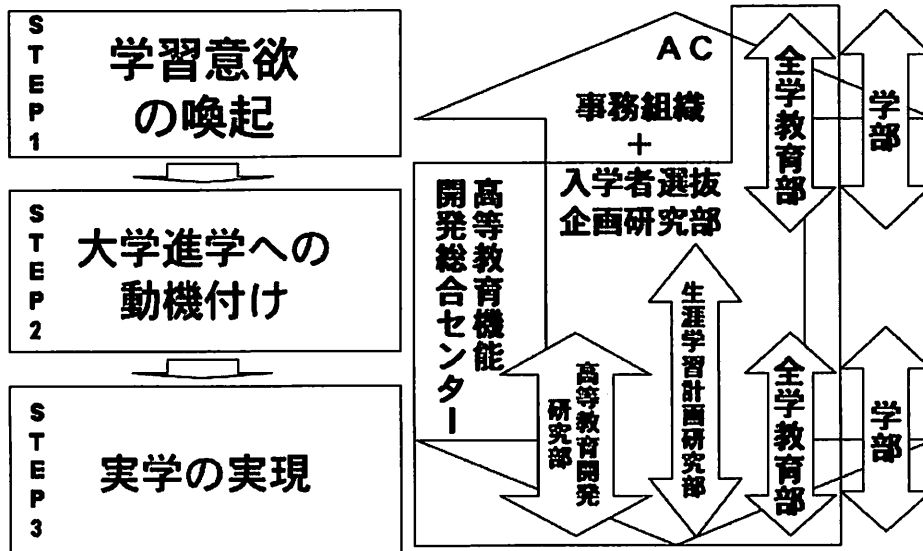


図4 北大式高大連携を可能にする組織

とを可能にしている。これが「北大式」と呼ぶ理由である。

前章で説明した北大式高大連携「地域説明会」の三つの目的を達成するために必要な、組織上の協力関係を示すと図4のようになる。地域説明会の参加者の学ぶ意欲を喚起するためには、北海道大学で行っている教育や研究を紹介しなければならない。したがって、全学教育部や各学部と北大ACとが連携をする必要がある。また、大学進学への動機づけを行うためには、地域に北海道大学を認知してもらい、大学と地域との連携を図らなければならない。そのためには、地域連携についての実践的研究を行っている生涯学習計画研究部と北大ACとが連携する必要がある。そして、実際に北海道大学を生涯学習の場として地域に開放しながら、地域における現場感覚を教育や研究に取り入れるためには、大学における教育方法について実践的研究を進める高等教育開発研究部や、各学部との連携を進める必要がある。

4. 帯広地域説明会

北大ACは、平成13年度に旭川地域[2]と帯広地域[3]とで異なる形態の地域説明会を実施した。本論文では、地域連携に重きを置いた帯広地域説明会の概要を紹介する。

4.1 説明会の目的

本説明会は、平成13年10月21日に道立A高等学校を会場にして実施した。本説明会を企画するにあたり、参加者に対して、以下の三つの期待する効果を設定した。

1. 知的好奇心の喚起
2. 学習への動機づけ
3. 地域からの支持

参加した高校生が、説明会の中で提示された大学での教育や研究を面白いと感じ（知的好奇心の喚起）、それについてさらに学びたいという行動を喚起すること（学習への動機づけ）は、高大の教育連携において有益である。さらに、本説明会では、高校生だけでなく、保護者や高校教員、そして一般の地域住民に参加してもらい、高校生とともに知的好奇心を喚起され、学習への動機づけが与えられることが重要である。北海道の場合、大学を卒業したことがその地域での雇用に結びつくことは少ない。このため、高校生が大学へ進学するためには、地域がその

時間帯	講演タイトル		所属	氏名
午的	北大とは？その魅力を語る		入選企研	鈴木 誠
午後	北大AOとは？北大の求める人材像		入選企研	池田文人
時間帯	テーマ	講演タイトル	所属	氏名
11:00 ～ 12:00	多様化する社会	都市の日常生活と法の役割	法学部	尾崎 一印
	グローバル化	現代のカルト問題	文学部	横井 雅男
	医療と福祉	ミクロの世界	医学部	阿部 和厚
	環境問題	中国北緯地帯における遊牧業の変容	農学部	黒河 功
	生命科学	葉物は細胞膜をどのようにして透過して細胞内にはいるか？	薬学部	加茂 直樹
13:00 ～ 14:00	多様化する社会	どこまで進む？フォトニックネットワークの高速度化	工学部	小泉 正則
	グローバル化	正道者は報われるか？	入選企研	山岸みどり
	医療と福祉	人形形成と発達神経科学	教育学部	峰崎 洋一
	環境問題	動物の病気に学ぶ	獣医学部	横村 幸司
	生命科学	生命化学とその応用	理学部	門出 龍次
14:15 ～ 15:15	多様化する社会	アイヌ民族と憲法	法学部	常本 陽樹
	グローバル化	日本経済の構造改革	経済学部	彼々木憲介
	医療と福祉	書と人間（心と身体）を科学する	書学部	大畑 昇
	環境問題	溺れてしまったホタテガイの殻を返って	水産学部	三宅 勇典
	生命科学	カエル学への招待（特別版）	入選企研	鈴木 誠

図5 帯広地域説明会の講演および講義

大学を十分に理解し、大学の存在を支持している必要がある。そのような意味での「地域からの支持」を期待した。

4. 2 広報形態

本説明会は、上川地域に次いで北海道大学への受験者が多い地域である十勝地域を対象とし、十勝管内の高校生とその保護者、高校教員、地域住民に対して参加を呼びかけた。十勝管内でもっとも北海道大学への受験者・合格者の多い道立A高等学校に協力を得て、十勝管内の高等学校の校長会および教頭会で高校生とその保護者および高校教員に対して参加を呼びかけてもらった。地域住民に対しては、十勝管内の新聞社に取材を依頼し新聞を通じて参加を呼びかけてもらった。

4. 3 実施形態

4. 1節で掲げた三つの目的を達成するために、現在の社会において注目されている5つの分野について、それぞれ専門分野の異なる先生方の講義（各分野につき1時間授業を3コマ）を実施した（図5参照）。その5つのテーマとは、「多様化する社会」「グローバル化」「医療と福祉」「環境問題」「生命科学」である。知的触発は、ある一つの事象に対して多様な観点から考えることができることにより、その事象についてさ

らに知的好奇心が喚起されることと考えるからである。また、講師の先生には、専門用語を使わない、説明する文脈を明確に、などの注意を事前に文書で配布し、参加者の理解を促すよう考慮した。

4. 4 結果

参加者の延べ数は全15講義で397名であった。うち高校生が325名、保護者40名、高校教員16名、一般参加者16名であった。高校生については十勝管内の6校から参加があった。うち268名がA高等学校からであり、B高等学校から28名、C高等学校から15名、D高等学校から7名、E商業高等学校から3名であった。学年別では、1年生89名、2年生126名、3年生107名、既卒者3名であった。

本説明会の三つの目的がどのくらい達成できたかを調べるために、受講者に以下のような内容の質問紙調査を行った。

- 知的触発に対する効果
 - 学んだことの多さ
 - 学習への動機づけ
- 北大への進学意識の向上に対する効果
 - 受講後の北大への進学意識の変化
- 生涯学習の普及に対する効果
 - 高校3年生におけるセミナー継続に対する意識

高校生58名（既卒者1名を含む）、保護者6名、高校教員3名、一般参加者16名の合計83名から回答が得られた。質問1から4については9割以上がポジティブな回答であり、本説明会は「知的好奇心の喚起」と「学習への動機づけ」において効果があったと考える。質問5については、「今回と同じ形式で継続して欲しい」が全体の約85%を占め、「今回とは異なる形式で継続して欲しい」が高校生10名、一般参加者2名であった。「継続する必要はない」は皆無であった。いずれにせよ、回答を寄せたすべての受講者が何らからの形式で北海道大学の情報を直接もらいたいと思っており、これは帯広地域から北海道大学が支持される可能性は高いと考える。しかし、本説明会の参加者の多くをA高等学校の生徒や保護者、高校教員が占める。A高等学校は進学率がほぼ100%の進学校であり、北海道大学へも毎年数十名の合格者を出している。このため、こうした説明会に対する関心や要望が強いのは当然である。今後は、大学への進学が少ない、もしくは、北海道大学への進学が少ない高校に対してこうした説明会への参加を呼びかけ、効果を検証していく必要がある。

5. おわりに

北海道大学のアドミッション・センターは、大学への入学前から入学後、そして卒業後にわたる長期的な観点に立った入試広報および調査・研究などの活動を行うことのできる、全国に先駆けた組織である。このような長期的な観点到った活動ができることにより、以下のような効果が期待できる。

1. 大学における勉学に対する明確な目的意識を持った学生の獲得と育成
2. 卒業後の進路に対する目的意識を持った学生の獲得と育成
3. 生涯にわたる学習への動機づけがなされた学生の獲得と育成
4. 大学で習得した知識や技能を地域社会にフィードバックするという視点を持った学生の獲得と育成

このような長期的な効果については、現在検証を進めているところである。

参考文献

- [1] 鈴木誠、山岸みどり、阿部和厚、池田文人、「北海道大学におけるAO入試マニュアル」、高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—、No.10, pp49-58、2002
- [2] 鈴木誠、阿部和厚、山岸みどり、池田文人、「高大連携を重視した北海道大学リクルート戦略（1）」、高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—、No.10, pp39-48、2002
- [3] 池田文人、阿部和厚、山岸みどり、鈴木誠、「高大連携を重視した北海道大学リクルート戦略（2）」、高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—、No.12（投稿予定）